

SONRISA
そんりさ Vol.151



メキシコ・ナルコ回廊の旅

メキシコでは、サンタ・ムエルテ(死の聖母)崇拜
が流行している (山本昭代撮影)

- | | | |
|----|----------------------|-------------|
| 02 | メキシコ・ナルコ回廊の旅 | …… 山本昭代 |
| 08 | アフリカ系アルゼンチン人 | …… 伊香祝子 |
| 15 | ブラジル新政権 | ……一井不二夫訳 |
| 17 | コロンビア・スピーキングツアー呼びかけ | …… 柴田大輔 |
| 19 | ラ米百景 キューバ革命戦争の実相 | ……伊高浩昭 |
| 20 | ペルー音楽「在りし日の聖地アマンカエス」 | ……水口良樹 |
| 22 | メキシコ食巡り「アボカドのスープ」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 23 | ニュースクリップ | ……サザエ |

メキシコ・ナルコ回廊の旅 2014

山本 昭代

2年ぶりのメキシコ。2014年8月末から1週間ほどメキシコシティに滞在した後、また北部に向けて旅してみた。

メキシコ南西部・ゲレロ州で学生43人拉致殺害事件が起こったのは9月26日、私が帰国してしばらくしてからだった。11月にはいよいよ国民の不満が募って、デモや大学封鎖やらで国中大騒ぎになった。近年で最悪の大量殺害事件だとして国内外の文化人やアーティストらもこぞって事件を話題にし、11月20日のメキシコ革命記念日には追悼と抗議のデモが各地で繰り広げられた。組織犯罪の暴力はこれまでずっとメキシコ各地で嵐のように吹き荒れていたが、多くの国民は直視するのを避けてきていた。ここに来て政府の無策ぶりへの怒りが湧き上がってきたようだ。

ペーニャ・ニエト大統領とはいえば、元昼メロ女優の妻が、政府と利害関係のある建設会社から豪邸を格安で購入していたなどのスキャンダルも発覚して人気はガタ落ち、大統領をかたどった巨大な人形が首都の中央広場で燃やされたりもした。それでも経済優先の姿勢は相変わらずで、社会問題への対応は口先だけで終わっている。

組織犯罪がらみの暴力がどれほど深刻か、学生拉致殺害事件をきっかけに改めて浮き彫りにされた。なにしろ、失踪した学生を捜索するために山中を掘り返してみると、焼かれたり薬品をかけられたりした遺体は何十も、あちこちから出てきたのだ。ゲレロ州だけではない。メキシコ中、秘密墓地だらけというおぞましい状況なのだ。遺体が発見されても、数が多すぎてDNA鑑定で身元が確認できたのはこれまでにわずか2%だという。この8月、政府は2006年以降の行方不明者の数は2万2322人だと発表した。この数字がどこまで信憑性のあるものかを疑う向きもある。

組織犯罪がらみでは、ペーニャ・ニエト政権は「成果」を挙げてもある。2014年2月にはシナロア・

カルテルのボスで世界最大の麻薬マフィアと呼ばれた「チャボ」ことグスマン・ロエラが逮捕された。ミチョアカン州では地元を牛耳っていた「templero 騎士団」カルテルを、地元民が結成した自衛団が中心となって攻撃し、警察と軍は大物ボスらを逮捕や殺害することができた。6月には、サッカー・ワールドカップをテレビ観戦中だったティファナ・カルテルのボス、「エンジニア」ことフェルナンド・サンチェス・アレジャーノを逮捕した。

このような派手な逮捕劇があっても、前政権から引き継いだ「麻薬戦争」は終わるどころかますます泥沼化しつつある。久々に会った留学時代の恩師も、「政府は麻薬カルテルを終わらせる気などない」とあっさり。麻薬密輸は需要があって供給があるのだし、国にとっては重要な外資の獲得源だし、政治家にとってはなにより大事な選挙資金源だ。組織犯罪と密接に結び付いた汚職は、メキシコの文化といっていいほど根が深い。ある研究者によれば、メキシコの地方自治体の8割近くは犯罪組織と関係を持っているという。サパティスタが「われわれ抜きのメキシコはあり得ない」と叫ぶように、麻薬カルテルも同じ言葉を皮肉に笑ってつぶやいているというわけなのか？

この8月末、メキシコの新聞『レフォルマ』が、米墨国境近くの街で、6月にメキシコ各地のおもな麻薬マフィアのボスが一堂に会する「ナルコ・サミット」が開催されていたとスクープした。なくならないものならば、せめて無用な暴力が起きないよう、組織同士、仲良く話し合ってもらえないのかかもしれない。

熱狂するムエルテ信仰

さて、メキシコシティで最初に再訪したかったのが、サンタ・ムエルテ(死の聖母)。ムエルテ崇拝の流行は相変わらずさかんな様子で、中心街の歴史地区の街角に立つムエルテさんたちは、相変わらずお

しゃれなドレスに身を包み、くぼんだ目で道行く人々を見守っていた。

毎月1日が、ムエルテの月例祭の日。ミサには大勢の人が訪れるという。2年間に訪れた教会の場所がわからなくてうろうろしていると、ムエルテ像を抱えたカップルを見かけ、ついて行かせてもらった。メキシコ州からわざわざ来たのだという。教会にはすでに30人ほどの人が集まり、しばらくするとミサが始まった。司祭の服装はカトリックの司祭服と同じように見え、ミサの様子もカトリックとほとんど変わらない。ギターを抱えた男がサンタ・ムエルテをたたえる歌を歌い、ミサの伴奏を務める。ミサの最期に老若男女の参列者同士、握手を交わし合うのも、カトリックのミサと同じ。もちろん私も、戸惑い顔の周りの人たちと仲良く握手させてもらった。カトリックと少し違ったのは、そのあと司祭が参列者にひとりずつ体に触れ、「お祓い」の儀式をしていたところ。ワステカの先住民族の村で見たまじない師のやり方と似ていた。壁に料金表が貼られていて、お祓いは300ペソ〜。日本円で2400円くらい。「あなたもやってもらえるよ」と言われたが、現金の持ち合わせがあまりなく、残念ながら体験は見送った。ミサが終わった後、司祭と少し話げできた。彼によると、このサンタ・ムエルテ教会はカトリックの一派だといい、ムエルテはもとはスペインから来た、聖書にも現れる聖人が姿を変えたものなのだそう。この教会の創始者、ダビ・モロ氏は犯罪組織との関係を疑われて刑務所に入っているが、メキシコだけでなく世界各地に信者がいて、司祭はミサをあげるために各地に出張することがあるのだそう。

もう1軒、テピート地区のムエルテ教会にも行ってみた。タクシーに住所をいい、ムエルテ教会だというと、「道路がふさがっているから、近くまでしか行けない」といわれた。それがどういうことか、着いてみるとわかった。ミサに参列する人々がざっと見ただけで数百人、道路を埋め尽くしていたのだ。その中心にある建物は、教会と呼ぶにはあまりに貧相な外観で、色あせたムエルテ像の写真がプリ



④テピートの教会に信者が持参したムエルテたち。軽トラックの荷台を即席の祭壇にしている。

⑤ムエルテへの信仰心の深さを示すために、供物を抱え、膝でいざって教会まで歩む男性。

ントされたビニールクロスが掲げてあるだけである。それでも、道路上には参列者が持参した、形も色もさまざまな大小のムエルテ像が並べて置かれ、それぞれに花やキャンディーなどが供えられている。他人のムエルテ像にお供えするために、大箱入りのキャンディーを買ってきている人もいた。人ごみのところどころからモクモクと煙が上がっている。タバコとは違う、モグサのような匂い。その煙をムエルテ像の口元に口移しで吹きかけたりしている。背中や腕に入れたムエルテの入れ墨を見せびらかせている人も目に付く。さらに肩に真っ赤なバラの花束を担ぎ、膝でいざって教会まで歩いていく男性も。いざり歩きで膝から血を流しながら詣でるのは、メキシコの守護聖母グアダルupes寺院で見かけ

たことがあった。よほど重大な願でもかけているのか。

群衆の所々から、左翼の集会でよく聞かれる調子のシュプレヒコールが上がった。「ムエルテはここにいる！ ムエルテを感じる！ ラ、ラ、ラ！」。ここでは、サパタではなくムエルテなのだ。確かに、反体制という共通点はある…。この熱狂ぶりはいったいどこから来るのだろうか？

ミサは予定の時刻を少し過ぎて始まった。教会の持ち主のドニャ・ケタと思しき年配の女性は、ごく普通のエプロン姿で群衆に対して注意点などを少し話し、次いで普通のジャケット姿の中年男性が神の教を説き始めた。最後まで聞いてもこの人出ではケタさんと話をするのは難しそうだし、薄暗くなり雨も降り始めたので、この危険地帯から早々に退散することにした。

北の「戦争」地帯へ

今回は、首都からメキシコ湾岸沿いのルートでアメリカ国境へと向かった。まずは首都からバスで約7時間、以前人類学調査のために住みこんでいたイダルゴ州北部の街、ウエフットラ近郊の先住民族の村へ。村では若い世代が都市に出ていく傾向は変わらないが、それでも以前と変わらずトウモロコシを育て、ニワトリを飼い、小商いをして家族が助け合う、昔ながらの暮らしが続いているようだった。地元の人たちによると、隣り合うベラクルス州では凶悪な事件が多発している、この地域ではナルコがらみの事件はほとんどないという。「あまりにも貧しくてナルコも来ない」というが、こんな穏やかなメキシコも健在なのだ。

ウエフットラから夜行バスで約12時間、北部の先進工業都市モンテレイへ。かつては治安がよく暮らしやすい街で、この街の高級住宅地区にはメキシコでも一番の金持ちが住んでいることで知られていた。もちろん、争いを避けたいナルコのボスたちの家族も。ところが2010以降、ロス・セタスとゴルフ・カルテルがこの街の支配権を巡って争うよう



ウエフットラで見かけたサンタムエルテグッズの店

になり、銃撃戦が起き、ギャングが道路封鎖を行い、多くの飲食店が焼き討ちに遭うなどして多数の犠牲者が出た。最近は大きな事件の報道はないとのことだが、マスコミに出ないだけかもしれない。モンテレイの長距離バスのターミナルの前には装甲車が停まり、黒やオリーブグリーンや迷彩色などさまざまな制服の兵士や警察官が巡回していた。

モンテレイで友人たちにとって名物の仔羊料理をご馳走になり、さらにバスで北へ。北部の国境の街、レイノサまで、灌木が生えるだけの半砂漠の平原を約3時間半。途中、何も無いところでバスが停車すると、ごつい体格の兵士が乗り込んできた。「さー、全員降りてチェックさせてもらおうか。外は暑いぞ～。ハハ、まあやめとう」

窓の外を見ると、ライフルを抱えた重装備の兵士が数人。軍の検問だった。メキシコらしくジョークですませてくれたが、この国は戦争中だったのを忘れてはならない。

カルテルが支配する街

国境の街、レイノサ。埃っぽい田舎のターミナルといった風情で、周辺には土産物の屋台と安宿とスーパーくらいしかない。ターミナル前のレストランで少し離れた場所の安宿を教えてもらい、チェックイン。宿の主人は親切で、部屋もそこそこ静かそ

う。どこかで昼食でも、とホテルを出て歩き始めると、後ろから若い男が呼び掛けてきた。振り向くと、マイクロフォンで何か話しながら、こちらを追いかけてくる男がいた。

「身分証を見せろ」という。「警察？ だったらそちらが先に身分証を見せなさい」というと、「われわれはカルテルのものだ、街を見張っているのだ」冗談でしょ？

「どこのカルテル？」と聞くと、「ゴルフオだ」。すぐ後ろに四輪駆動車が来て、助手席の男が携帯で話しながら、「われわれは犯罪者が入りこまないように街を警戒しているだけだ。やろうと思えばなんだってできる。パスポートを見せろ」という。男の丸々とした太い腕にはびっしりと刺青が。観念してパスポートを手渡した。

刺青男は日本人か、と珍しがって、「アメリカに行くのか？ ビザはないのか？ 泳いで向こうに渡るのか？」と聞く。日本人はアメリカに行くのにビザはいらない、というがなかなか信用してくれない。刺青男はさらに携帯でどこかと連絡を取り、まあいいだろう、とパスポートを返してくれた。返す前に「何歳だ？」ふん、そこに書いてあるでしょ。

「女性にはそれは聞かないものよ」と笑って答え、一緒に写真撮っていい？ とたずねたが、もちろん断られた。

あとで宿の主人にその話をすると、「大丈夫、やつらは何もしないから。金も取らない。街の治安を守ってくれているんだ」と笑っている。カルテルが街を支配するとは、そういうことなのだ。国家に代わって警察の役割や収税もカルテルがやり、市民と共存する。どこの誰が街に来て、どこの宿に泊ったのかもカルテルはすべて情報を得て、実際何でもできるのだ。安宿にひとり泊まっている日本人女を身ぐるみ剥いで河に捨てる、なんてことも。改めて背筋が寒くなった。

ちなみにタマウリパス州の国境の街のなかでも、レイノサとメキシコ湾岸のマタモロスがゴルフ・カルテルの支配地で、西のヌエボ・ラレドはロス・セタスが支配する。それぞれ、どのカルテルが街を

支配下に置くか決着がつくまで抗争が続き、残虐な報復合戦が続く。抗争は対立カルテル間だけとは限らず、内部抗争もしばしばなようだ。



国境の河リオ・ブラボ。橋の下には国境警備隊のジープが停まっている

国境をまたぐ3つの世界

幸い何事もなく朝を迎え、国境の橋へ。緑色の淀んだ水をたたえたりオ・ブラボ(アメリカ側ではリオ・グランデと呼ぶ)のアメリカ側の岸では、ボーダーパトロールらしい人々が、ジープや四輪バイクのような乗り物で茂みを出入りしているのが橋の上から見えた。橋を渡り切ったところのアメリカの入国管理局には50mくらいの人の列があったが、30分も待たないうちに順番がきた。周りの人に聞くと、日曜なのでふだんより人が少ないということだが、ここでの国境の人の往来は、シウダー・フアレスやティファアナほど多くはないようだ。マッカレンで人に出会う、と適当な話をして入国税7ドルを支払った。

入管を出たところはテキサス州マッカレンだが、そこにはレストランとスーパーと銀行くらいしかない。せっかくだからとバスで中心街方面に行く。途中、道路の両側に見えるのは、中古車販売店、自動車部品店、衣類のリサイクル店など、メキシコ人向けの店ばかり。バスを降りたターミナルにも、メキシコ人向けの衣類や生活雑貨などの大型卸店が並ぶ。この街の経済は、メキシコ人の買い物ツアーに大きく依存しているという。街並みも建物も小ぎれいで清潔で、国境のすぐ南の、くすんで古びた建物や埃っぽく猥雑な雰囲気とは対照的だ。

マッカレンのバスターミナルから、レイノサに帰るバスに乗る。乗客はほとんどがメキシコ人だった。20分ほどで国境の橋に。降りてパスポートチェックかな、と思っていたら、バスのトランクが開けられて税関職員がざっと見まわしただけ。バスはそのまま国境のゲートをくぐって、レイノサのバスターミナルへ。アメリカからメキシコに入国するのは何と簡単なことか。

ターミナルからホテルに戻る途中、前日声をかけてきた若い男が所在なげに道角で座り込んでいるのが見えた。名前は「カルロス」だといった。組織ではないって呼び名で呼ばれるものなので、本名ではないだろうが。彼のようなカルテルの見張り役は「アルコン(タカ)」と呼ばれ、組織の最下層に位置付けられる。ロス・セタスが小学生の女の子を見張り役に雇っていた、という新聞記事を読んだことがある。声をかけると親しげに挨拶をしてくれて、近くにいた奥さんにも紹介してくれた。この街には角ごとに彼のような見張り役がいるのだそうだ。なんでカルテルで働くようになったのか、とたずねると、以前はコンビニの店員をしていたが、週800ペソ(約6400円)にしかならず、妻と子ども3人を養っていけないのでこの仕事についた、まだこの仕事を始めて数か月だという。

「稼ぐためにはリスクも負わなくちゃ。仕方ない」と笑った。レイノサは地方からの移民が多いが、カルロスは両親とも地元出身で、自分は小さいときからアメリカに10年暮らしていたが、母親が亡くなったのをきっかけに地元に戻ったのだという。それにしても、カルテルの人とこんな普通の会話が交わせるとは…。

この日はもう夕方のメキシコシティ行きの飛行機を予約してあったので、ホテルに戻るとさっそくタクシーを呼んでもらった。時間に余裕があったので、タクシー運転手に頼んで街を案内してもらうことにした。運転手はレイノサで働いてもう10年になるベテランだった。まずは修道女らが運営する「移民の家」という施設。メキシコを縦断する厳しい旅の末、レイノサまでたどり着いた中米出身者や、逆

にアメリカで捕まったが金がなくて本国まで送還されず、国境の南に送り込まれた中米人らが、この施設にやってくるのだという。移民たちには無料で食事と寝る場所が提供されるが、ずっと中にはおれないので、建物の外の日陰で時間をつぶす人が、多いときで数十人にもなるという。近くのリオ・ブラボの河岸には、河でおぼれ死んだ移民らを悼む白い十字架が建てられていた。川幅は30mもないように見えるが、水深が深いのだそうだ。そのすぐ横には「ワニに注意」の看板も。コヨーテと呼ばれる密入国あっせん人は、パトロールの交代の時間などを知っていて、アメリカ側の厳しい監視の目をかいくぐって河を渡らせるのだという。

次に案内されたのが、河沿いにトタン板や木の板を合わせただけに見えるバラックが並ぶ地区だった。よそから流れ着いた人たちが住み着いた場所で、犯罪者の巢窟だったが、カルテルが見張るようになってからよくなった、と運転手。カルテルは警察と同様、犯罪者をとらえれば、1回目は説諭だけで放免する。だが2回目に捕まると腕などを切り落とすのだという。

街で一番の金持ちが住む地区にも連れて行ってもらった。しかしここがそうだとわかれても、無駄に広い道路に塀ばかりで中は何も見えない(笑)。1軒だけ、コロニアル調の博物館のような豪華な建物が見られた。そこは運送会社の所有者でこの街一番の金持ちファミリーの自宅だった。しかし実際には、ほかの豪邸と同様、普段住んでいるのは使用人たちだけだ。所有者らは安全な国境の北側に暮らし、子どもたちも向こうの学校に通っているのだとか。

最後に訪れたのが、空港近くに広がる工業団地。ほかの国境の街と同様、1994年の北米自由貿易協定以降、政府によって広大な工業団地が整備され、外国企業の誘致が行われた。レイノサには、富士通やパナソニック、ミクニなど多くの日系企業が進出している。大部分がアメリカ東海岸の都市に近いという地の利を生かした自動車や工業製品の組み立て工場である。カルテルは外国企業に手を出すと、地元企業家の怒りを買って、政府からたたかれることに

なるので、手出しをしないのだそうだ。工業団地の周辺には、これも政府が建設した公団住宅が建ち並び、運転手の話では、工場では食堂で3食無料で提供され、公団住宅のローンは20年分割で毎月の給与から差し引かれ、さらに勉強したい若者には夜間の大学などに通える制度もあるという。工場の入り口に求人広告を張り出しているところも目につく。交代勤務は確かにきついだろうが、まじめに働けば家族とともにそれなりに暮らしていける。仕事がないからカルテルに入る、とばかりは言えない。

ここレイノサには、アメリカ東海岸の都市を目指し、中米や国内各地から不法移民として河を渡ろう

と無数の人々がやってくる。麻薬も同様である。蛇の道はへび。それを仕切れるのはカルテルしかない。国家権力は実質上及ばず、カルテルが市民生活と共存している。その一方で、街の郊外にはグローバル企業が最新の設備を備えた工場を展開し、勤勉なメキシコ人低賃金労働者の汗を吸い上げる。そして国境の河の向こう側には、小ざれいで安全なアメリカの地方都市。そんな3つのまったく違う世界が背中合わせに存在する。グローバル化と新自由主義が作りだしたパラドックスである。

アヨツィナパ学生43人拉致殺害事件

9月26日、ゲレロ州アヨツィナパの教員養成大学の学生43人が拉致殺害される事件が起きた。学生らはイグアラ市市長夫妻が主催するイベントを妨害しようとバスで市内に入ったところ、市長の命令を受けた警官らに銃撃され、3人の学生が死亡。通りかかったタクシーや別のバスで移動中だったサッカー選手らも銃弾を受け3人が死亡した。

警官らは学生43人を拉致し、麻薬密輸マフィア「ゲレロス・ウニードス」に引き渡した。マフィアらは学生たちを殺害し、ごみ焼却場で遺体を焼き、遺灰をゴミ袋に入れて川に捨てたとされる。実行犯の証言により遺灰は回収されたが、損傷の度合いがひどく、特殊な技術を持つオーストリアの大学に鑑定を依頼。11月7日、遺骨の一部が失踪学生のひとりのものと判明したことを発表。しかしそれ以外の身元は確認されず、政府発表の信ぴょう性を疑う向きもある。首謀者とされる市長夫妻は逮捕されたが、国内各地で大規模なデモや抗議行動が起こり、ペーニャ・ニエト大統領は国外メディアからも批判を受けるに至っている。

アフリカ系アルゼンチン人

伊香祝子 訳

概略

アルゼンチンのアフリカ系住民の起源は、スペイン王室統治下のラプラタ副王領時代の奴隷貿易にある。18～19世紀にかけて、いくつかの州においては、アフリカ系が人口の半数以上を占めるに至ったが、19世紀に急速に人口が減少した。[訳注：この急速な人口の減少の要因をどこに求めるのがさまざまな論議を呼んでいる] 19世紀の半ばには移民が奨励され、アルゼンチンの人口は急成長したが、その結果起こったヨーロッパ移民との異人種間の混合は、アフリカ系アルゼンチン人が「不可視化」されたことのひとつの要因とされている。アフリカ系アルゼンチン人の減少のもうひとつの要因としては、彼らのコミュニティ内部での死亡率の高さがある。

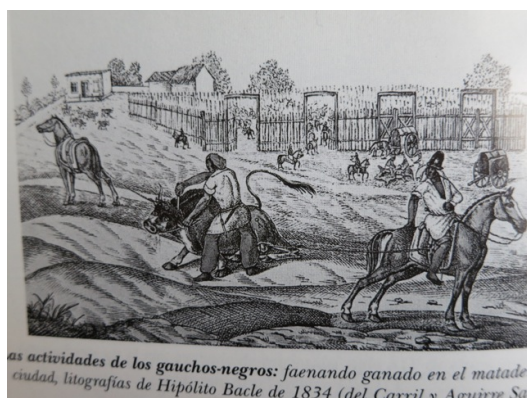
2005年の4月にブエノスアイレス市でアフリカ系子孫についてのパイロット調査が行われたが、住民の3%がアフリカ系黒人のルーツをもつと意識しているという回答が得られた。このことはブエノスアイレス大学遺伝学センターの調査が、ブエノスアイレスおよび周辺の人口の4.3%が遺伝的にアフリカにルーツがあるとした推計結果を裏付けた。

2010年の国民調査のデータによれば、アルゼンチン国内のアフリカ系の子孫の人口は14万9493人（全人口の0.4%）にのぼる。このうち92%の13万7583人がアフリカ系アルゼンチン人で、残りの8%の1万1960人はアメリカ大陸の他の国々の出身であった。

植民地時代のアフリカ人の導入とルーツ

征服の過程で、アメリカ大陸における植民地の経済体制は、さまざまな形で先住民の労働を収奪した。しかし、比較的人口密度の低かった地域や、文化変容への抵抗と服従や、厳しい労働、ヨーロッパ人により持ち込まれた伝染病などは、先住民の間に多くの死者をもたらしたため、これにより不足した労働力を補うためにサハラ砂漠以南起源のアフリカ人が奴隷として連行された。

19世紀の後期まで、鉱山の採掘や農業はアメリカ大陸の経済活動の主体であった。こうした労働の大部分は、奴隷制や類似したやり方により確保された労働力によりまかなわれた。征服者は、アフリカ人が地理的に近かったことやヨーロッパ起源の伝染病

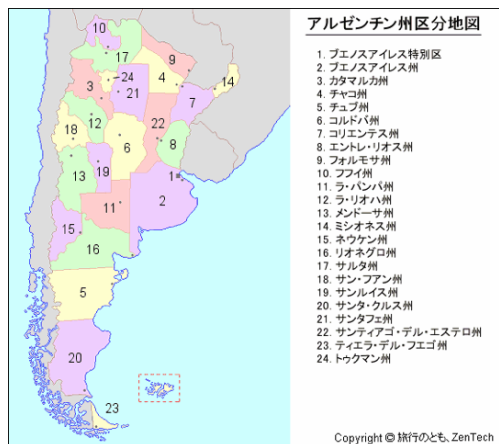


黒人のガウチョ

や植民地の熱帯気候への適性などの利点を見出した。アフリカ人奴隷の流入はラプラタ副王領時代の1588年にはじまり、ブエノスアイレス港を通じて奴隷売買が盛んになった。1713年にイギリスはスペイン継承戦争に勝利して奴隷貿易を占有した。1784年に奴隷売買が禁止されるまで黒人たちは体を計測されたあと、鉄の焼き印を押された。

16世紀以前の奴隷の出身地は、大半は現在のアンゴラ、コンゴ民主共和国、ギネア、コンゴ共和国で、バンツール語系の言語を話す民族に属していた。アメリカ大陸にはおよそ6000万人のアフリカ人が送られ、南アメリカに生きて到着したのは1200万人だと推定されている。

奴隷は主に農業、牧畜、家事労働などの労働に従事し、少数が手工芸に従事していた。都市では多くの奴隷が小売りのための手工芸の労働を展開し、その利益は彼らの主人のものとなった。ブエノスアイレスのサンテルモやモンセラット地区には、多くの奴隷が一時滞在したが、大半は内陸に向けられていた。フアン・ホセ・デ・ベルティス・イ・サルセド（当時の副王）が実施した人口調査では、1778年には農業生産の多い諸州で高い数値－サンチアゴ・デル・エステーロ州で54%、カタマルカ州で52%、サルタ州で46%、コルドバ州44%、トゥクマン州42%、メンドーサ州24%、ラリオハ州20%、サンフアン州16%、フワイ州13%、サンルイス州9%であった。その他の諸州でも人口のうちの重要な位置を占めている。コリエンテス市の低所得の地区のひとつは「カンバ・クア」グアラニ語で「黒人たちの洞穴」という名を持っている。



ブエノスアイレス市についていえば、同じ1778年の統計でスペイン人1万5719人、メスティソ、インディオが1288人、ムラト、黒人7268人であり、1810年には白人2万2793人、9615人の黒人とムラト、150人のインディヘナと算定される。

ナシオン

黒人とその子孫は、何世代にもわたって混血がすすみアルゼンチンの土地に適応した後も、当然のことながら彼らの独自の文化—古い習慣、信心、言語など—を忘れることはできなかった。彼らのあまりにも異なる習慣—ことに歌と踊りは自由奔放で、植民地時代のブエノスアイレスの「慎み深い」と自称する隣人たちを困惑させ、恐怖に陥れるほどであったが、ラプラタ副王は限定つきでこれを認めた。

多くの場合それらのダンスは、厳しい検閲を当局から受けて、黒人たちが所有するに至った場所—簡素なわらと日干し煉瓦でできた小屋や、タンボまたはカンドンベと呼ばれた「土の小屋」—以外では、禁止され隔離された。黒人は出身の民族毎にまとまり、独自の組織を作って、彼らの楽器のリズムで歌い踊るために、それらの場所に定期的に集まった。しばしば彼らは「ナシオン」とよばれるグループごとに集まったが、ナシオンはコンガ（デ・モレノス）、カブندا、アフリカナ・アルヘンチナ、モサンビクなどと名付けられていた。

その場所は、開放的な場所で踊るために砂が敷かれるという共通点があった。それ以外に、閉鎖され内部に自由な空間があるものもあった。絨毯がしかれ、気前の良い主人によりカーテンが取り付けられた部屋もときにはあった。ナシオンには（民主的に選ばれた）王と女王がいて、彼らはナシオンの旗と

ともに、部屋のなかで一番いい場所に据えられた玉座についた。演壇や台があって、それはとりわけ高位の人を迎えるために利用された。高位の人とは、マルティン・ボネオの絵にもあるように、ロサス大統領や、その家族=次頁の写真=というような人びとである。そこでは集まりやダンスパーティーが開かれた。

同時に、黒人はデル・モンドンゴやデル・タンボールと呼ばれる地区で盛んに集まった。デル・モンドンゴはブエノスアイレスでもっとも重要なものであり、モンセラットの16地域から成り立っていた。名前の由来は大量のモンドンゴ（豚の臓物、臓物の煮込み料理）がそこで消費されていたことにあり、タンボール（太鼓）のほうは、どこの村にもかならず一つはその名前のついたナシオンがあった。「タンボール（太鼓）」は彼らが歌い踊るときにもっとも好んだ楽器だからだった。

アルゼンチンの形成期におけるアフリカ人

奴隷制の縮小にもかかわらず、この時期の証言によれば、奴隷はブエノスアイレスやモンテビデオで、ほかの地方よりも比較的残酷でない扱いを受けていたとされている。ホセ・アントニオ・ウィルデは「70年前のブエノスアイレス（1810-1880）」で「奴隷は彼らの主人によって真の愛情をもって扱われており、それは他の植民地とは比較にならないほどであった」と記している。とはいっても、虐待に関する証言ももちろんあった。

奴隷に対する扱いについては、外国人による記録も残っている。たとえば英国海軍艦長のアレクサンダー・ギレスピーは、回想録に「われわれ（英国）の農園主と南アメリカの農園主」の奴隷の扱いを比較して、南アメリカでの待遇の良さに驚いたことを記している。そして、ブエノスアイレスで買われた奴隷が、主人から土地の言葉を教わり、女性が裁縫を習い、食事の前後には祈りをささげることなどを教えられていることを書き残した。

黒人と自由ムラトの兵士たちの義勇軍は、ブエノスアイレスに昔から存在し、規制され訓練されていたものだが、1801年にブエノスアイレスとモンテビデオ、アスンシオンに中隊が設置された。1806年の英国の侵略後、これらのブエノスアイレスの中隊は先住民の兵士とともに、ムラトやパルド、現地民の中隊とは一線を画したカスタ（植民地時代に使われ



た混血集団をさす語)の大隊を建設した。こうした兵士たちの一部は砲兵隊のカスタの軍団に移された。奴隷の軍団も、ブエノスアイレスの緊急時の防衛のために組織されたが、彼らには武器は渡されなかった。五月革命のあと、カスタの大隊はパルドとモレノの連隊を結成し、アルゼンチンの独立戦争のすべての遠征に参加した。

英国の侵略の時代には、ブエノスアイレスでは、英国での奴隷制廃止論の高揚に勢いづいた黒人奴隷が決起した。彼らは英国軍の遠征隊が、主として彼らに独立をもたらすためにやってくるだろうと信じた。しかし英国の将軍ウィリアム・カー・ベレスフォードは、この運動に共感を示さなかった—ブエノスアイレスのクリオージョ(植民地生まれの白人支配層)の代弁者であるフアン・マルティン・プエイレドンは、奴隷の幻想を消滅させなければ、破滅が国をおびやかすだろうと主張し、彼らの農園に対する好意的な処置を要求し、結果としてベレスフォードは、奴隷に状況は変わらないと理解させるよう命令する公示を発令した(プエイレドンは、1806年に彼のカディスにいる義父宛の手紙で「彼らを食い止めるのに間に合った」と書いた)。この処置は、奴隷を英国人たちとの戦闘に駆り立て、英国を敗北にいたらしめた。

英国の敗退後、ブエノスアイレスの市議会は「私たちの土地から奴隷制を追放する方法を考えること」を宣言した。そして、黒人の勇気ある振る舞いに対して、くじまたは選挙による奴隷からの解放を与えるように奨励したが、実際には軍団メンバー全員のなかで解放奴隷の割合は少なかった。

だが、1810年には奴隷の強制的な徴用を行わざるをえないケースが増えた。というのも、所有者らが奴隷の譲渡を拒んだからである。くじまたは選挙に

よる奴隷解放は放棄され、国軍で一定の年数(通常5年)の兵役をもって奴隷の解放が公布された。

黒人とそれ以外の混血(パルド、ムラト、モレノその他)のカテゴリーのあいだの区別はひきつづき存在し、混血の兵士が部隊構成員の三分之一を超えることは絶対になかった。先住民や黒人兵士の給与は、クリオージョやスペイン人の連隊のメンバーの半分だった。そして、彼らは歩兵隊、砲兵隊のみに配属され、古くから優越的であった騎兵隊には入れなかった。また、連隊のなかで公的な肩書ももてなかった。

だがこうした問題は、独立期を代表する個人の努力や、1810年の五月革命の基本的な思想によって克服された。それは発達しつつある民主的な法律がうみだしたものであり、社会的階層における彼らの地位をおしあげるものであった。

1811年からパルドとモレノの軍団は古参兵の軍団となり、1812-13年にはプロフェッショナルの軍団とされた。フアン・ホセ・カステリは、自らの率いる軍隊中のカスタ中隊の功績を高く評価し、彼の動議により、1811年からカスタの士官は榮譽と認識の同義語である「ドン」を自分の名前に加えることができるようになった。

だが、1812年にベルナルド・デ・モンテアグドが三頭政治に就任しようとしたとき、彼のアフリカ系のルーツをほのめかす「母方の血縁に関する疑念」を理由に妨害を受けた。矛盾しているが、抗議者のひとは同じようにアフリカ出身者の子孫であるベルナルディノ・リバダビアであった。1813年アルゼンチン最初の憲法制定議会が、奴隷の母親から生まれた子どもの自由は宣言したが、すでに存在する奴隷の自由の権利は認められなかった。

しかしながら、ホセ・デ・サン＝マルティン將軍のおかげで、1816年以降、彼らはアルゼンチン国軍の役職につくようになった。サン＝マルティンは、黒人のなかにも優れた能力を持つものがあることを認め、伍長や軍曹の地位に限り彼らを取り立てるよう要望した。

彼らの多くは、後日アルゼンチン陸軍を構成することになる非正規の民兵や下士官兵の一部をなしており、いつも彼らだけで行動する暗殺隊であった。彼らは主人と折り合いが悪い時は、(自分を)売ってほしいと頼んだり、自分で買主を探したりした。1853年の奴隷制の廃止まで、「復活令」は奴隷の所

有者に対し、奴隷の4割を兵役に貸し出すために譲渡することを義務付けていた。兵役を5年間完全に遂行したものは自由を得られるということになっていたが、実現したケースは少なかった。

独立軍は、非常に多くの奴隷を徴兵し、彼らに兵役と引き換えに自由を約束した。彼らの多くは第8大隊のメンバーとなり、多くの戦死者をだしたチャカブコの戦いで衝突の前線に出た。

ロサス政権下で

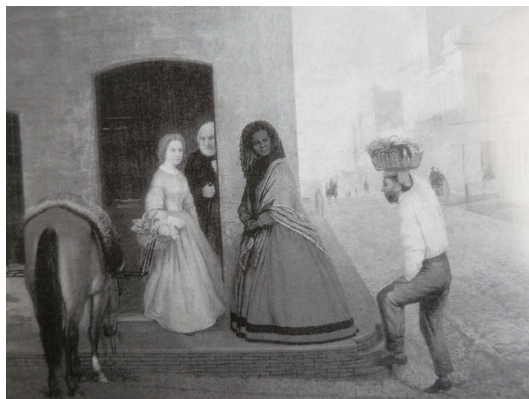
フアン・マヌエル・ロサスが権力の座にあった時代（1829-1852）は、ブエノスアイレスの社会でも黒人が参加し影響を与える時代の到来であった。ロサスは下層階級を偏愛し、黒人は政権の主な柱のひとつとなった。彼らはステータスの上昇を実現し、同時に政治的に利用されもした。しかし、ロサスは奴隷制度そのものにたいしては矛盾した態度を取り、最終的には1840年に奴隷の交易を廃止したが、彼の任期中に奴隷制度を強化したり許可したりすることもあった。

ロサス政府の時期にブエノスアイレスの黒人人口は30%に達した。そして、この時期にはアメリカ大陸的なカーニバルが行われていたことが記録されている。カンドンベやミロンガなどのリズムが発達し、アルゼンチンの民俗音楽の一部を構成するようになった。ロサスが黒人を非常に賛美し、カンドンベに参加していたことは語りつがれている。当時、農村で働いていたガウチョの多くはアフリカ系アルゼンチン人であった。

黒人はロサスの軍隊と恐怖の帝国の支柱であったが、ときとして彼の振る舞いは尊敬だけでなく恐怖も生み出した。多くの黒人はロサスに忠実であったが、例外もあった。裏切った者や脱走兵、統一派の支持者やそちらに寝返った者は軽蔑的に「ムラト」とみなされた。

軍隊での黒人の利用は、連邦派、統一派の両軍で行われており—確実に連邦派の側が上回っていたとはいえ—そこではいくつかの場合において黒人が重要な職務につけられていた。デマゴグ的な粉飾はあったにせよ、社会的・政治的に連邦派のほうが黒人に対して民主的な態度をとっていた。

だが、そのような連邦派の態度が黒人の社会的経済的な状況をめだって改善したとはいえず、1837年にロサスが国内での奴隷売買を禁止する法を発令



ヨーロッパ人の従僕を従えた裕福な黒人女性

し、1840年にラプラタ地方におけるあらゆる形態の奴隷の売買を廃止するという宣言を行いこそすれ、奴隷解放を決定的にしたわけではなかった。

完全な自由

1853年の共和国憲法は奴隷制を廃止したが、それが完全なものになるには1860年憲法を待たねばならなかった。

ドミンゴ・F・サルミエントの大統領時代（1868—1874）には、アフリカ系アルゼンチン人の大量死の原因としてあげられる二つの出来事が起こった。ひとつはパラグアイ戦争（1868—1874）で、もうひとつは1871年のブエノスアイレスでの黄熱病の流行である。

奴隷制の廃止後も、アフリカ系アルゼンチン人は差別をうけ、生活は悲惨な状況だった。1857年にはブエノスアイレスにある14の学校のうち二校だけが黒人児童を受け入れたにすぎない。同様に1829年にはコルドバで中等科の学校に入学できたアフリカ系の生徒は年に2名だけだったし、大学で学べるようになったのは1853年のことだった。

アフリカ系アルゼンチン人は新聞を発行し始め、力を合わせて自分たちを守る組織を作った。それらの新聞のうちのひとつは「ユニオニスタ」で、1877年には肌の色を問わずすべての人びとの権利の平等と正義の宣言を発表した。ユニオン紙の第一号は、「古く憎むべき植民地時代の体制に追随し、使用人を奴隷のように扱おうとしている」「伯爵や侯爵夫人」のようにふるまう人々を批判し、「彼らは自分たちがばかにしている人びとの多くが、不格好な服装の下に彼らを虐げる者たちよりすぐれた知性を隠していることを理解しない。」と指摘している。

これ以外には、1858年発刊の「La raza africana o

sea el democrata negro」と「El proletario」がある。1880年ごろにはブエノスアイレス市にはおよそ20の同様の新聞があった。

アフリカ系の人びとはまた政治にも進出した。たとえば、ミトレ派の現役大佐ホセ・M・モラレスは州議会下院議員、憲法制定議会議員となり、のちには1880年に州の上院議員となった。一方、ドミンゴ・ソーサ大佐は二回下院議員に当選し、1854年に州の憲法制定議会議員になった。

アフリカ系アルゼンチン人に何が起きたか？

これまでアルゼンチンの黒人人口は19世紀の初頭から減少し始め、ついには実質的になくなったとされてきた。しかし2005年に二つの地区で行われたアフリカ系の祖先に関するパイロット調査によれば、約3%の人びとに、黒人アフリカにルーツをもつ先祖がいることがわかっている。

ヨーロッパからの移民が1960年のアルゼンチンの人口増加の半分以上を占めていることを念頭において、黒人人口の減少よりもアフリカ系アルゼンチン人とその文化的なルーツの「不可視化」のプロセスがそれ以前にあると指摘する研究者もいる。20世紀初頭にはアルゼンチンの人口の30%は、イタリア、スペイン、ドイツ、スラブなどにルーツをもつ移民だった。何よりも、アルゼンチンは米国の2700万人について、660万人と世界で二番目に多く移民を受け入れた国であり、その数はカナダ、ブラジル、オーストラリアよりも多い。

アフリカ系の人口減少が指導者階級に責任があったとするジェノサイド説も存在する。

- ・戦闘を理由とする人口の減少 多くの血が流された長きにわたるパラグアイ戦争（1865－70）に参戦した陸軍のなかで黒人は特に多数をしめており、両軍の死者は多数に上った。正史はこのような状況が黒人の消滅を引き起こしたとしているが、ジェノサイド説では意図的に不均衡な徴兵があったとしている（出典未確認）
- ・疫病の流行 特に1871年の黄熱病 ※この黄熱病の流行時に軍隊がアフリカ系住民の集中する街区を封鎖したため、中で病気が蔓延し多くのアフリカ系の人びとが死亡したとする見方もある。このことをネグリチュード運動の中心的人物で、プロ

レタリオ紙（週刊）を創設したルカス・フェルナンデスと関連付けた論考もウェブ上で見ることができるので参照していただければ幸いだ。<http://www.latinoamerica-online.info/soc03/afro01.03.html>

（訳者）

- ・移民 特に歴史的に黒人が多く、政治的にも住みやすく整備されていたウルグアイへの移住
- ・1853年憲法によって後押しされた1850－1950年にかけてのヨーロッパからの大量の移民が、国内の人口を急激に増加させた。指導者階級のアルゼンチンの西欧化プロジェクトに準じたヨーロッパからの移民は現実的に、そして象徴的に黒人にとって代わっていたであろう。

数少ない19世紀末のアフリカ系アルゼンチン人の研究者の幾人かは、ヨーロッパ移民が黒人にとってかわったという仮説について、男性の比率の多さから現実的ではないと指摘している。反対にこのデータはヨーロッパ人男性たちとアフリカ系アルゼンチン女性たちの間の通婚を強く示唆しているとする。同様にヨーロッパ人移民は、黒人人口の多かった北部の諸州には大量には定住しなかったことも考慮にいれなければならない。

1887年には、公式の黒人人口比率は全体の1.8%と算定された。これ以来国民調査には記録が残っていない。国家の姿勢は1895年の国民調査実施時の責任者の発言「もうすぐ、アルゼンチン人は完璧に新しく美しい白い民族に統一されるであろう」にはっきりとあらわれている。そして、この時以来ほぼ1世紀の間、アルゼンチンではアフリカ系アルゼンチン人に関する研究は実質的に行われなかった。

1930年代以降、内陸部の農業労働者の国内移民が増加し、ブエノスアイレスなどの都市へ、工場労働者としての働き口を求めて出て行った。1940年代以降、こうした人びとは群衆となり、中上流階級の広いセクターの人びとにより侮蔑的に「カベシータス・ネグラス（黒い頭）」（後述）と呼ばれた。

この数十年のあいだに、歴史的かつ社会学的な黒人住民にむけられた研究が現れ始め、それらの研究の結果は、広い層の人びとに驚きとともに迎えられ、またあるときは拒絶された。この数年間、アフリカ系アルゼンチン人についての研究や活動が増えている。一般的にいってその結果は、身体的であれ

文化的であれ、その存在は公式に考えられているよりもずっと大きいということである。

文化的影響

アルゼンチンでもっとも長くつづいている黒人の影響といえばタンゴだろう。タンゴには、奴隷が発展させたタンゴスと呼ばれる祭りや儀式の特徴が受け継がれている。奴隷はタンゴスと呼ばれた個人宅に主人の許しを得て集まった。ミロンガ・カンペラやミロンガ・シウダダナ（ダンス）、マランボ、チャカレラなども、パヤダ（歌試合）と同じく黒人の影響を受けているのだが、いまだにそれを立証する研究が欠けている。マルティン・フィエロのほか、詩人でパヤドルのガビノ・エセイサ

（1858-1916）＝写真＝やイヒニオ・カソンなどのパヤドルがよく知られていた。ピアニストで作曲家のロセンド・メンディサバル（1897-1962）は、同時にタンゴの作曲家かつ奏者で、「エル・エントレリアノ」



（1897）の作者で黒人だった。同様にタンゴの作曲家カルロス・ボサダス（1874-1918）、ギタリストでバンドネオン奏者、作曲家（ワルツ「ラ・プルペラ・デ・サンタルシア」の作者）エンリケ・マシエル（1897-1962）、オラシオ・サルガン（作曲家、指揮者、ピアニスト）、ウルグアイのサンカルロス生まれで、「サンロレンソのマーチ」の作曲者カエタノ・シルバ、アカデミックな音楽教育を受けた音楽家で、解放者ホセ・デ・サン＝マルティンの遺体がアルゼンチンに帰還した時に演奏され捧げられた「偉大な葬送マーチ」などの多くの楽曲を作ったセノン・ロロン（1856-1902）などがある。歴史家のフアン・アルバレスはベルリン楽派の旋律・拍子の比較原理にそって、タンゴやブエノスアイレスのミロンガ、カランバ、マロテの音楽形式にアフリカとの関連性がみられることを明らかにした。

アルゼンチンのスペイン語の口語には多くの黒人アフリカの単語が見られる。たとえばムカマ、ボチンチェ、 Dengé、モンドンゴ、キロンボ、マロテ、

カチンガ、マンディンガ、カンドンベ、ミロンガなどであり、多くがルンファルド（ブエノスアイレスのスラング）で使用されている。同様に植民地時代からのアフリカ系アルゼンチン人は、口承によって彼らの日常会話と歌の中で、ルンファルドに交じっていったものとは別の表現を維持していた。「墓地」は「カルンガ」、白人を侮蔑的に「ムンデレ」そして「クセ」を「あれ、あの人」など。宗教的な面では、カーニバルの祭り以外に、聖ベニートや聖バルタサル（東方の三博士の一人で黒人）への崇拜などがあり、聖バルタサルは今日でもコリエンテス州の広い範囲、チャコ東部、フォルモサ東部、サンタフェ北部で崇拜されている。

植民地時代の人種的カテゴリー

植民地時代を通して、スペイン当局はアフリカ系の黒人とそれ以外の民族との結合から生まれた人びとをさまざまな「混血」の「品種」と形容した。社会的には、家系図に「混血」がみられることは汚点であった。これらの分類は、その他の植民地時代にあった「メスティソ」「チョロ」などとともに、人に烙印をおし、社会的上昇をさまたげるために使用された。

19世紀以降の移民

カーボベルデ アルゼンチンには1万2千人から1万5千人のカーボベルデからの移民の子孫などが居住している。そのうちの300人ほどがアフリカ生まれだ。カーボベルデからの移住は19世紀末から始まって、1920年代以降目立ってきた。もっとも移住者が多かったのは1927年から33年にかけてであり、その次は1946年で、干ばつによる飢餓と多数の死者によるものだった。彼らは船員や漁師として技術があったので、ロサリオやブエノスアイレス、サンニコラス・デ・ロスアロジョス、カンパナ、バイア・ブランカ、エンセナダ、ドク・スルなど港のある地域に定住した。

その他のアフリカの国々 ブエノスアイレスのバリオ・オンセと呼ばれる地区には、母国の貧しさを逃れてきたアフリカ人—とくにセネガル人—が多い。「ブエノスアイレス難民協会」によれば、彼らは難民としてブラジルのビザを取り、その後アルゼンチンにときには密航者としてやってくるのがあ

るという。在留許可が得られないと、彼らは人身売買の標的となる。セネガル人コミュニティでは日曜日になると伝統的なセネガル料理を食べるために集まる人々がいる。飲食店のなかにはアフリカ料理をメニューにのせているところもある。

サンタフェ州のロサリオ港は、21世紀になってから、アフリカから密航してきた人びとを迎え入れる玄関口となった。彼らはしばしば行先を知らずに、北半球の発展した国に向かうと信じて乗船した。彼らの出身国はナイジェリア、コートジボアール、ギニアなどで、人びとは、搾取、戦争、宗教、イデオロギー、政治的な迫害などを理由に祖国を逃れ、密航者として到着した。数は少ないものの年々増加している—2008年には70人が難民としてやってきた（前年には40人）が、定住したのはたったの10人でのこりは送還された。その多くが未成年だった。

ラテンアメリカの他の国から〜ドミニカ共和国〜

1990年代初頭から2001年の経済危機にいたるまで、1ドル1ペソの為替政策の結果として、貧しい国々から高いドルでの給与を稼ぎ、出身国に稼いだ金を持ち帰ろうとする移民の流れがあった。やってきたのは、アフリカ系のドミニカ人女性たちである。彼女たちのなかには人身売買の被害者もいた。2008年にはドミニカからの移民の第二波が始まった。ドミニカ人女性による定住申請は、移民局の統計によれば、2007年の663人から2008年の1168人に増加した。当局は「偽旅行者」を発見し、彼女たちを連れてくるマフィアを根絶するための管理体制を敷いた。

肌の色に関するアルゼンチンのレイシズム

アルゼンチンではほかのアメリカ大陸の諸国とおなじように、肌の色やアフリカ起源の人に対する差別は植民地時代にさかのぼる。アフリカ起源の人びとの子孫は、先住民族に属する人びとの子孫よりさらに低い地位におかれた。植民地時代の差別は、アルゼンチン文化にも受け継がれ、国民的な文化のなかにもそのような表現が見られる。ホセ・エルナンデスの『マルティン・フィエロ』(1872年)の有名なシーンでのやりとりには次のような歌が登場する。

白人は神様が作られた

ムラトは聖ペドロがお作りになった

黒人は悪魔が作った

地獄の燐にするために（7章）

アフリカ系アルゼンチン人とその文化の故意の「不可視化」は、アルゼンチンにおける肌の色やアフリカ・ルーツへの差別のはっきりとした表現だった。

2006年の10月9日、アルゼンチンのアフリカ系子孫とアフリカ人のフォーラムが、社会文化的な複数主義を推進し、これらの人びとへの差別と闘うために創設された。この活動のなかで「差別・外国人排斥・人種差別に反対する国立研究所 (INADI)」の所長マリア・ホセ・ルベルティノは、アフリカ系アルゼンチン人に対する不可視化をこのような言葉で認めた。「アルゼンチンのアフリカ系の人びとは、かつて見えないようにされていたし、現在も見えない存在である。これは奴隷制度とそれが変化した隷従によって作り出されたディアスポラの過程の産物である… 彼らは現在貧困層におかれている」

また、20世紀の半ばからは、主に低い階級の労働者を「カベシータス・ネグラ」や「ネグロ」「ネグリタ」「ネグラダ」などの侮蔑的な呼称で呼ぶことが一般化している。多くの場合、「社会的な関係性が人種と結び付けられて」ており、肌の色とはまったく関係なく、「黒い」という単語はただ単に労働者の男女を侮蔑的に呼ぶために使われている。またペロン派の支持者の多くが貧しい労働者階級であったことから、彼らに対してネグロという罵倒語がつかわれることが現在でもある。また、「ネグロ」

「ネグラ」などの単語は先住民族に属する人びとを差別する目的や、他のラテンアメリカ諸国からの移住民やその子孫に向けられることがある。サッカーの応援歌にもそういった側面が見られ、ボカ・ジュニオールズのファンを「ボリビアやパラグアイの汚い黒人」と「非難」するものが有名である。

本稿について アルゼンチンではごく最近までアフリカ系アルゼンチン人の存在は「不可視化(invisibilización)」されてきた。本稿は主にウィキペディアのスペイン語版 Wikipedia "La población negra argentina" (2014.10.29取得。一部略) にもとづく。原版には注・参考文献・外部リンクが付されているので参考にさせていただきたい。

ブラジル大統領選 困難に直面するだろう二期目のルセフ

昨年10月26日におこなわれたブラジル大統領選挙決選投票で、労働党（PT）のジルマ・ルセフ大統領は、有効投票の51.6%を獲得して再選された。国民議会での保守派の割合が増えることを考えるならば、当選した翌週から、今後4年間の任期が困難なものになることを認めざるをえなかった。

ルセフは5450万票を獲得、これにたいしてブラジル社会民主党（PSDB）のアエシオ・ネベス上院議員は5100万票、48.3%という結果であった。これはブラジル大統領選挙史上もっとも伯仲したもので、選挙戦では優劣が何度も入れ替わった。

最初のころの世論調査では、ルセフ大統領は余裕をもって先頭にいたが、2014年の初頭からネベスとブラジル社会党（PSB）のエドゥアルド・カンボス候補が支持を伸ばし、その差は徐々に縮まっていった。

だがペルナンブコ州の元知事であったカンボスは、選挙戦のさなかの8月13日に飛行機事故で死亡する。カンボスの死によって、彼とコンビを組んで副大統領候補だったアクレ州出身の元上院議員、マリナ・シルバが大統領候補となった。そして事実上枠外と見られていた彼女が、ルセフとネベスを追いついて、世論調査でトップに急浮上する。

このあとルセフとネベス両陣営からの、シルバ候補の討論会での主張の一貫性のなさにたいする、

「つぶし」のための猛烈なキャンペーンがおこなわれた。その結果10月5日におこなわれた第1回投票では、ルセフとネベスがそれぞれ1位と2位となり、2人のあいだで決選投票が争われることになった。

第1回投票のあとの最初の世論調査では、ネベスがルセフを上回った。さらに激しい選挙戦が繰り広げられた。ルセフ大統領は、ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルバ前大統領（2002－2010）と彼女

の労働党政権下でおこなわれた社会プログラムの重要性を繰り返し訴えた。

多くの国際組織が指摘しているところでは、このプログラムによって、ブラジルでは数百万人が貧困状態から脱出した。ムエストゥレオ・ドゥ・オガレス社による国民調査では、極貧状態——1日1.25ドル以下の収入で、食糧、飲料水、住宅、医療など生きるために最低限必要な手段を欠く状態——にある人々の数は65%減少し、2003年の15.2%から2012年の5.3%に減少した。2003年から2013年までの年平均成長率は3.5%であり、社会への参加と「新中産階級」に属する人の数が増大した。約4000万人のブラジル人が、DとEの階層からCの階層へと移動した。一方ネベスの側は、PSDBのフェルナンド・エンリケ・カルドゾ元大統領（1995－2002）時代の成果、インフレを強力に抑えたことなどを強調した。

ルセフは少しずつ支持を回復し、最後の調査ではネベスよりも優勢となった。いずれにしても結果は非常に接近するだろうと予想され、実際ルセフ大統領は僅差で再選された。ルセフの勝利は、ブラジルでもっとも貧しく、労働党の社会プログラムの恩恵をもっとも受けている北東部からの大量の得票があったこと、そして、ネベスの出身地であり、彼が2期知事を務めた（2003－2010）ミナスジェライス州でも票を獲得したことがあげられる。

ルセフは勝利演説のなかで、何度も彼女の選挙での後援者、ルーラ前大統領について触れたが、いまや彼は次期大統領選で彼女の後を継ぐ強力な候補者となっている。ルセフ大統領は、彼女の優先すべき仕事のひとつが、国民投票を通じておこなわれるであろう政治改革の約束であると表明した。

政治改革には政党と選挙キャンペーンにたいする公的資金の提案、選挙制度の見直し、政党連合の形

成、議員の代行制度、議会における決定の秘密投票化などが含まれる。

しかし議会側の反撃が始まるのに1週間もかからなかった。論理的に言って、議会こそがこの改革によってもっとも影響を蒙るのである。10月28日、下院はルセフ大統領自身が5月に署名をした布告を無効とした。これは社会参加国家政策（PNPS）を設立して、参加のメカニズム、公聴会を定めたものであった。

分析家によれば、これは、コントロールを手放さない、根本的な政治改革を受け入れないという議会からの明白なメッセージだった。労働組合間議会諮問局（DIAP）資料部の責任者であり、政治分析家のアントニオ・アウグスト・ドウ・ケイロスは「彼らは憲法制定議会を含むような広範な政治改革は、議会に代表を持つ新しい政治組織、民主社会（SD）、連帯、社会秩序共和主義（ROS）、キリスト教社会民主（SDC）、全国エコロジー（EN）、全国労働者（TN）などを含めて受け入れないだろう」と指摘する。

「新しい政党が、現在の規則を変更する改革にたいして関心を持つことはない」。彼の意見では（政治改革のための）独占的憲法制定会議による改革は、3つの条件がそろった場合にのみ実現しうる。一つ目は、「政府が強いイニシアチブをとること」、これは難しいだろう。なぜならルセフ大統領は、議会と交渉するのに大きな困難を持つだろうから。二つ目は「議員への国民からの大きな圧力があること」。三つ目は「新しい規則が『寛容』で、直近の選挙には適用されないこと」である。そして憲法条文の変更は、ドウ・ケイロスの見たところ、議会の308票にかかっているが、「これは容易なことではない」。

カンピナス国立大学哲学科のロベルト・ロマノ教授は、政治改革の実施は大変困難をともなうと主張する。「われわれの政治の歴史では、それをかけらも望まないときに、常にそれが語られるのだ。そし



ていま、政治改革について盛んに語られている」。本当の改革というものは「いまある政党の構造のなかで、完全な変革を通じて」始められなければならないと、ロマノは強調する。そして「ブラジルの政党はどこであれ非民主的なものである」という。

大統領選挙とともに、513議席の下院議員選挙、81議席のうち54の上院議員選挙、27の州知事選挙がおこなわれた。

ルセフを再選させた「人民の力とともに」を掲げた連立には、ブラジル民主運動（MDB）、民主社会（SD）、共和国進歩主義者、民主的労働者（DL）、ブラジル共和主義（RB）、社会秩序共和主義（ROS）、ブラジル共産党が入っており、これらは下院で300議席を有しており、また労働党は現状から18議席を失ったものの、70議席で依然第1党を維持している。下院において優位とはいえ、つねに反対に回るものがあり、議案ごとに賛否を決める際に合意を図らなければならない。多くの場合、党の方針よりも利害がこの連合を支配している。

結局のところ、次期政権は多くの交渉が必要となり、政治には大きな困難をともなうであろう。ただし労働党による社会プロジェクトがより広く強力に進められ、そして経済成長が、ルーラ政権時代やルセフ自身の政権での最初の数年間のようなレベルを取り戻せれば、連邦政府は議会からの強固な支持を得られるであろう。

（Noticias Aliadas10/11/2014より 訳：一井不二夫）

写真はルセフ（左）とルーラ

コロンビア・スピーキングツアー 開催に向けて

柴田大輔（フォトジャーナリスト）

1. 「記憶の家」建設

そして紛争後へ向けた故郷再生へ

50年に及ぶ国内紛争が続くコロンビアでは、多くの農村で人々が安全を求めて故郷を去りました。とりわけ激しい紛争に巻き込まれた場所の一つがアワ民族自治区のマグイです。現在240あまりの家族が暮らしていますが、ほぼ誰もが身内に紛争・暴力の犠牲者がいます。その地でリーダーとして地域をけん引し、傷ついた故郷を再生させるシンボルとして「記憶の家（Casa de memoria historica）」の建設に取り組むホセ・チンガルさんを今年、日本に迎え、スピーキングツアーを開くことになりました。2015年5月頃を予定しています。

マグイでは多くの人が暴力の犠牲となりましたが、人々は悲しみを表現することなく、内に抱えたまま淡々と日々を生きています。そんな中で、犠牲者の名前を記し、この地で起きたことを自分たちの手で後世に伝えようとする試みが「記憶の家」です。記念館であるとともに、住民の共有スペースとして活用し、失われつつある民族文化、紛争以前の歴史を次世代へ継承する場としていきたいと、ホセさんたちは考えています。

私は2013年2月から2014年8月にかけてマグイで10ヶ月あまりを過ごし、ホセさんの活動取材してきました。彼は記憶の家を「ミンガ」で作りたくと話します。「ミンガ」とは地域住民による賃金の伴わない協働作業です。家や道路など公共のものをつくるとき、住民は協働で作業にのぞみます。日本の「結（ゆい）」と非常に近い存在で、労働だけではなく、そこで交わされる各世代の触れ合いを含めて、小さな社会を維持する礎となるものです。ホセさんは地域を去った人にも声をかけ、残った人とともに、それぞれの年代を超えた人々による協働作業

で記憶の家を作ろうと考えています。新しい未来へ再出発したいという、故郷再生へかける強い気持ちの現れだと感じます。

紛争地で生きてきたホセさんの歴史と、故郷再生へ向けた強い志に耳を澄ますことは、私たちに貴重な示唆を与えてくれるでしょう。同時に「記憶の家」建設のための資金を募り、日本とコロンビアの草の根のつながりを広げる生むきっかけにしたいと考えます。

2. 多様な世界コロンビアと アワ民族、マグイ

コロンビアの美しさは風土と人の多様性にあると私は感じます。万年雪を湛えるアンデス高地、多彩な動植物を育む熱帯雨林、爽風が身体を包む常春の高原、砂漠、海——。世界はこんなにも多様なのかと、私はコロンビアで初めて体感しました。各地に根付く人々が豊かな文化を花開かせています。コロンビアには102の先住民族集団が存在し、その一つアワ民族は南部を中心に隣国のエクアドル北部にもかけて、山深い地に3万人あまりが暮らしています。マグイはアワ民族自治区の一つで、エクアドルとの国境近く、標高1500m前後の温暖な場所に位置し、年間300日近く降る雨が沢山の動植物を育てています。目に見える強い自然の力の中で生活していると、人もその一部なのだと確認させられます。ここで人々は、トウモロコシ作りを軸に自然のサイクルに合わせた生活を何世代にもわたって繰り返しています。何でも育つという豊かな土地を人々は愛し、穏やかな生活を送ってきました。

そんな生活の平穏は90年代後半に破られました。反政府ゲリラ、政府軍、右派民兵の勢力圏が微妙に重なり合い、凄惨な暴力にさらされるようになった

のです。政府軍と、それ共闘する民兵は、山間に暮らすアワ民族をゲリラのシンパだと疑って迫害しました。一方で、農村のために立ち上がったはずの反政府ゲリラも、自分たちの意思に反することがあれば容赦なく住民に銃を向けてきました。山々には飛び交う爆撃機、砲弾、銃の音が日常的に響き、地雷が仕掛けられて、多くの人が命を奪われました。2006年には戦闘の激化により、マグイに暮らすおよそ300家族あまりのうち9割が避難民となりました。

3.ホセさんのスピーキングツアー 開催へ向けて

ホセさんは現在60歳。紛争の前から、辺境にあって中央政府に顧みられないマグイを住み良くしようと、その中心に立って活動してきました。幼いころは非先住民族の人々から受けた差別への反発もあり、親元を離れて様々な仕事をしながら各地を渡り歩いたそうです。その期間は10年に及び、沢山の人や土地との出会いから「人の生き方」を学び、「地域の違いとそこで起きる問題」を肌で感じてきたと私に話してくれました。大らかで前向きな人柄、豊かな人間性が多くの人を惹きつけています。私もその一人です。

コロンビアは日本からみれば地球の反対側にあります。そこで生きる一人の人間の物語に触れることで、私はこの世界の多様性と、人間の持つ共通性を感じました。そして、そこから自ずとコロンビアと日本の姿が相対的に見えてくるのではないかと思います。今の日本で、一つの方向へと向かいつつある社会に生きる私たちは気付かぬうちに、本当は沢山あるはずの選択肢を自ら手放しているのではないのでしょうか。それがどれほど生きにくい世界をつくっていることでしょうか。人はどんな生き方をしてもいいはずです。私はコロンビアと、そこに生きる人々との出会いによってそう思えるようになり



地域のリーダーとして会議を見守るホセ・チンガル氏。スピーカーとして日本とアワ民族をつなぐ

ました。私が自分の人生を歩むスタートラインに立てたきっかけだとも感じています。

コロンビアは今、反政府ゲリラFARCと政府の間で和平交渉が続き、紛争終結へ向けた大きな動きの中にあります。暴力のない新しい未来を誰もが欲しています。このタイミングだからこそ話することができる、また、そこに込められる熱があるのだと思います。ホセさんの志はきっと私たちに何かを伝えてくれるでしょう。未来へ向けたコロンビアとの新しい繋がりの機会を皆さんと共有できればと思います。

なお、運営は実行委員会を作り進めてまいります。ご協力いただける方いらっしゃいましたら、是非ご連絡ください。また資金面につきましてもお力添えのほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

公式ブログ

「コロンビア・スピーキングツアー2015」
(<http://colombiajapon2015.blog.fc2.com/>)
メール colombia_japon2015@yahoo.co.jp

フィデル・カストロが指揮した キューバ革命戦争の実相

キューバ革命最大の貢献者フィデル・カストロ（現在88歳）は2010年に、革命戦争（1956年12月2日～59年1月1日）を理論化するため上下2巻の戦略論を国家評議会出版局から世に出した。上巻は『戦略的勝利－マエストラ山脈の全ての道を辿って』（邦訳・明石書店2012年）、下巻は『マエストラ山脈からサンティアゴデクーバへ戦略的逆襲』（同2014年10月）である。感想を言えば、下巻の方がはるかに面白い。叛乱軍最高司令としてのフィデルの革命思想、戦略・戦術、部下たちとの関係、政府軍将兵についての分析、財政と武器弾薬の細かな管理ぶり、革命後に果たすべき公約などが詳しく綴られているからだ。それらは自ら執筆した命令書と叛乱放送声明、および演説に盛り込まれている。

フィデルは部下たちに戦場日記を書くよう命じていた。それらの記述の全体が革命戦争の実態と推移、戦士の心境などを総合するものとして、革命史を形成することになるからだ。最も有名なのはエルネスト・チェ・ゲバラの『革命戦争回顧録』だが、フィデルの『戦略的逆襲』も負けず劣らずの価値がある。両者の内容の大きな違いは、エル・チェ（チェ・ゲバラ）がフィデルの主要な部下の一人として日記を書き綴っているのに対し、フィデルは最高指導者として全体を見渡しながら書いていることだ。最高命令者としてのフィデルにしか書けない内容なのだ。

叛乱軍が反転攻勢に出た1958年8月、学校教師上がりで優秀な部下ウベール・マトスがフィデルを経由せずに別の同志に武器を融通してほしいと直接働きかける。これを察知したフィデルは「私に隠れてこのような手続きがなされるのは不愉快だ。これでは全てが統御不能に陥り混乱する。いつになったら責任感のある同志の協力が得られるようになるのか」と批判する文書をマトスに送り付ける。するとマトスは「私の自尊心にも限界がある。私にもあなたと同じくらい自尊心があるの

だ。私はマエストラ山脈に来たことを残念に思った。あなたの侮辱は、キューバの命運が懸かっている今、多くの犠牲の一つとして受け入れよう。あなたの書き付けを返上する。対応を改めるよう求める」と感情露わに反論する。

するとフィデルは長い文章を書いてマトスを論難する。「個人主義者で己のことばかり考える者は、あたかも自尊心こそが何よりも重要であるかのように、ありもしない侮辱に神経を尖らせる。もし君が名誉や自尊心のために私の書き付けを送り返すという不謹慎な行動を撤回しないならば、指揮権を委譲せよ」と迫る。これを受けたマトスは、前言を撤回し、「私は、あなたが祖国のため、自由のために全霊を傾注しているのを認識しており、あなたに敬意を払い、従っていく」と従順になる。

革命戦争勝利後の59年10月、フィデルは急進的な革命政策に異議を唱えたマトスを「反革命罪」で逮捕し、革命法廷で禁錮20年の実刑に処す。マトスは刑期を勤めて79年釈放され、亡命地マイアミで2014年、96歳で死去した。フィデルは、マエストラ山脈の司令部防衛やサンティアゴ攻略戦でずば抜けた戦果を挙げたマトスを当初、実弟ラウールに次ぐ後継候補として考えていたようだ。革命政権でカストロ兄弟に次ぎ序列第3位のチェ・ゲバラが異邦人であり、新たな革命戦争を起こすため南米に去ることを予知していたからだ。しかしマトスは自由主義者で、社会主義、共産主義と相容れず、投獄された。マトスの獄中生活は自著『夜はいかにして訪れたか』に詳しく書かれている。

革命戦争の最終局面は58年12月末から59年元旦にかけて暗転し、叛乱軍の勝利は策謀によって奪われかける。当時の経緯とフィデルの対応策も本書に記されている。この件（くだり）も興味深い。フィデルがサンティアゴで59年元旦に行なった演説は圧巻。だが、そこに出てくる公約の多くが果たされないまま今日に至っていることに読者は気付くに違いない。キューバ革命に関心のある人には、読むに十分値する本である。

音楽三昧♪ペルーな日々（第57回）

在りし日の聖地アマンカエス

ペルーの民衆音楽において、アマンカエスという場所は伝説の場所の一つとされている。それはひとつはカトリックの聖人サン・フアン（聖ヨハネ）の聖地の一つであったということ。そしてさらに音楽を含むペルーの芸能に大きな影響を与えた場所であった、という意味で伝説の地として記憶されているのである。

アマンカエスの名は、もともとは花の名前である。この花がサン・フアン（聖ヨハネ）の日に咲き乱れる丘に付けられたという。美しいアマンカエスであふれる野原に変貌するため、丘と呼ばれるよりもアマンカエスの原と呼ばれることも多い。今回はこのアマンカエスをめぐる物語を少し紹介したい。

リマの北に位置するリマック近郊のアマンカエスの丘は、1582年よりサン・フアン（聖ヨハネ）の聖地として多くの巡礼が行われてきた場所だ。特に6月24日は、サン・フアン（聖ヨハネ）を祀る祭日として大いに盛り上がっていた。

その起源となる伝説を簡単に要約すると、1582年の2月2日、下男（しもやう）のロサリオ・ラモス（ロサリオ・ラモス）がいつものようにアマンカエスの丘（エル・ヒコ）を通過してドミニコ会修道院のカンデラリア・リカパック（カンデラリア・リカパック）にミルクを届けている時、突如イエス・キリストの幻（まが）が出現し、ここに教会を建てるようにと命じたというものだ。

ともかくそうして聖地となり巡礼が行われるようになったアマンカエスの丘のサン・フアン（聖ヨハネ）信仰であるが、巡礼者が多く訪れるこの地は、同時に植民期（しちんき）リマの有閑階級（ゆうかんかいきゅう）による娯楽（ごらく）の場としても発達してきた。古くは鹿狩り（かきうり）や鳩狩り（とんびうり）が行われ、19世紀頃（しちせいきう）の週末には、音楽（おんがく）や踊り（おどり）、食べ物（たべもの）が集まる一種（いちしゆ）盛り場（まじりば）として、さらに多くの人々（ひと）を集める場所となっていたことが、さまざまな年代記（ねんだいき）や残された日記（にっぴ）から垣間（かま）見（み）ることができる。19世紀（しちせいき）に描かれた絵画（えが）などでも



アマンカエスで行われていた乱痴気騒ぎ（らんちきさわぎ）の様子が見て取れる。多くの音楽家（おんがくか）や踊り手（おどりて）たちが週末ごとにアマンカエス（Amancaes）に集まり、まさに歌（うた）ったり踊（おど）ったりをしていたのである。

そうしたクリオーヨ（criollo）たちの芸能（げいぎ）の聖地（せいど）でもあったアマンカエス（Amancaes）に変化（へんか）が訪（き）れたのは1927年のことだ。この年（ねん）、リマ（リマ）の市長（しやうしやう）フアン・リオス（フアン・リオス）によって、インディオ（indio）の日（ひ）（21年（ねん）制定（せいてい）6月（ごう）24日（にち）のサン・フアン（聖ヨハネ）の日（ひ）であった）に音楽（おんがく）と踊り（おどり）のコンテスト（contest）が開催（かいさ）されるようになると、アマンカエス（Amancaes）でのお祭り騒ぎ（まつりさわぎ）はさらに加熱（かてつ）していくこととなっていった。ペルー（ペルー）初のコンテスト（contest）であったと言われるこのインディオ（indio）の日（ひ）のコンテスト（contest）は、非常に大きなインパクト（impact）をペルー（ペルー）社会（しやかい）にもたらした。当時（たうじ）官製（くわんせい）インディヘニスモ（indigenismo）政策（せいさく）を推（お）し進（しん）めていたレギア（legia）大統領（だいとうりゆう）も、積極的にこのイベント（event）を後（ご）押し（おし）した。そこにはリマ（リマ）に徐々（じょじょ）に押し寄（お）せてきた移民（いみん）たち（たち）にとって「リマ（リマ）っ子（こ）たちのもの（もの）」であったアマンカエス（Amancaes）の祭り（まつり）を、「地方（ちほう）出身（しゆしん）者の祭り（まつり）」へと転換（てんかん）することによって、移民（いみん）たちのリマ（リマ）での疎外（そがい）感を和（な）らげるといふ政治（せいぎ）的（てき）意味（い）合い（あい）もあったのかもしれない。音楽家（おんがくか）や歌手（こうしゅ）、踊り手（おどりて）たちが、リマ（リマ）や沿岸（えんがん）地域（ちいき）の村々（むらむら）から、そしてアンデス（andes）地域（ちいき）からも広（ひろ）く集（あ）まり、まさに国（くに）中の音楽（おんがく）と踊り（おどり）が一

同に介するコンテストとなったといわれる。丘の中腹にリマック市によって大きなステージが作られ、5万人の聴衆が訪れたというから、いかにすごいことになっていたのかわかっていたいただけるかと思う。

1927年の記念すべき第1回コンテストの優勝者は、リマ在住のクスコ音楽のトリオ・グループであった。2本のケーナとピアノによる演奏で、ワイノ、ヤラビー、「戦士の踊り」を披露して優勝した。さらに翌年のコンテストでは、コスコ土着芸術センターがクスコ・インカ芸術使節団の名前でクスコ市の後援を受けて出場した。

このように、アンデスの音楽と踊りのコンテストは、ピアノやエストゥディアンティーナのようなメスティソ的要素を含んだ音楽を、その初期から先住民の音楽として提供し、消費する、というスタイルが確立していたと言えるのだろう。それはこの時代にアンデス音楽をモチーフに歌劇やサロン音楽などを作曲した多くのインディヘニスタ作曲家が、それらの音楽を「インカ音楽」と明記していたこととも共通する意識があるのかもしれない。

リマ郊外のアマンカエスで行われたこの祭典は、ペルーの国民的イベントへと発展し、国民文化というものをイメージさせる大きな役割を担っていくようになった重要なイベントとなっていった。トンデロやマリネラ・ノルテーニャといった北部沿岸地方の音楽もリマのバルスやポルカとともに演奏され、そこに新たにインカ音楽の名のもとにアンデス各地の音楽が導入される。さらには最新のアンデス風エストゥディアンティーナ楽団なども参加し、まさにペルーの芸能の最前線がここで切磋琢磨しながら新たな地平を切り開いていく、そういう契機となったのである。

こうしてこのアマンカエスのフェスティバルは、1950年代まで盛況を極めたが、60年代に入ると増えすぎたリマの住民による宅地が丘の中腹にまで及



び、やがて会場自体が貧民街に飲み込まれる形で幕を下ろすこととなったという。

今や祖父母の昔語りや在りし日の伝説の地として語られるアマンカエスにまつわるノスタルジックな物語は、50年代以降、「在りし日のアマンカエス (Amancaes de Ayer)」というバルスとしてもロス・トロベーロス・クリオーヨスによって録音されている。カバーヨ・デ・パソと呼ばれるペルー固有の馬による馬術の披露なども行われていたことや、この祭典を盛り上げた多くの音楽家やダンサーの名前が歌い込まれたこの歌は、この地がリマの、そしてペルーの各地に住む人々に与えた影響を今に残す重要な記憶でもある。

また、かのチャブーカ・グランダ＝写真＝も名曲「ホセ・アントニオ」の中でもリマのバルンコからアマンカエスまで馬に乗って行く情景を華やかに歌っている。こちらは彼女らしいロマンティックな風景描写の中で、彼女が敬愛したホセ・アントニオとその馬が歌われている作品だ。

残念ながら私はアマンカエスには行ったことがない。リマから橋を渡るとすぐにリマックには入るが、リマック自体あまり歩いたことがない。それでも古い写真や絵画を見ながら、在りし日のアマンカエスで繰り広げられたためくるめくペルー民衆芸能のはじめの黄金時代を想像するのもまたひとつの楽しみだ。いつか行ってみたい場所である。

(水口良樹)

ミゲル先生のメキシコ食巡り アボカドのスープ

Sopa de Aguacate

今回はアボカド(aguacate)をつかった料理です。

アボカドは、ラテン語では月桂樹の仲間とされており、学名は“pesea americana”(アメリカの梨)です。

幅広い栄養があり、100g中に水分73.23g、タンパク質2g、炭水化物8.53g、熱量160キロカロリーを含みます。ビタミンB1、同B2、ナイアシン、ビタミンB6、ビタミンC、同E (2.07mg)、同K、カルシウム、鉄分なども含有しています。

アボカドがコレステロールを含むか否かについてはさまざまな議論がありました。この疑問にこたえるには、最近の研究を参照する必要があります。それによると、アボカドには12gの不飽和脂肪酸があり、そのなかには、有名なオメガ3やオメガ6、オメガ9といった脂肪酸が含まれ、飽和脂肪酸はわずか2gしか含んでいません。不飽和脂肪酸、すなわちHDLなどの善玉コレステロールが豊富で、これらの不飽和脂肪酸は、LDLなどの悪玉コレステロールを減らす役割を果たします。

アボカドは、繊維や、抗酸化作用のあるビタミンEやビタミンC、ビタミンB12、マグネシウム、マンガンなども含んでいます。これは、ほかの食べ物の脂肪が酸化するのを防ぎます。

こうした理由から、身体によい食べ物だと考えられるのです。

アボカドはメキシコ原産で、栽培の歴史は、紀元前1500年以前までさかのぼることができます。マヤの人々も、何千年も前から栽培しておりOonと呼んでいました。

その種子は世界中にもたらされ、palta、avocado (英語)、cura、abacate (ポルトガル語)などと呼ばれています。日本語では「アボガド」とも呼ばれていますね。



アボカドという名称は、スペイン語のaguacateから派生しており、aguacateは睾丸を意味するナウアトル語のAhucatlを語源としています。アステカ人は、木にぶらさがるアボカドの果実の形からこの名前をつけました。Ahuacatlという名前をはじめて聞いたスペイン人がAguacateと名づけました。

アボカドを使った、アステカ以前から伝わるソースがあります。Guacamole (グアカモレ) です。この名もナウアトル語でアボカドのソース、という意味のAhuacamolliを語源にしています。さまざまなソースのほか、アイスやスープ、シチューなど幅広い料理に使われています。

ユカタンには、日本で売られているアボカドの3倍の大きさになるものもあります。実家の台所からアボカドがなくなることはありませんでした。母はアボカドで、シチューやスープ、ソース、アイスクリームやアイスキャンディもつくってくれました。

日本にきたばかりのころ、アボカドはデパートにしかなく、入手するのが大変でした。でも今はスーパーはおろかローソンなどのコンビニでも売られています。家に常備しておく、さまざまな料理やサラダに使えて便利です。寿司にしてもよいし、味噌汁とアボカドだけをおかずにもできます。

今回のレシピはアボカドのスープです。

■材料 4人分

- ・熟したアボカド 2個
- ・牛乳700cc
- ・砂糖 大さじ2杯
- ・粉末パセリ

■作り方

- 1) アボカドを切って殻と種を取り除く。殻をとるのは、スプーンを使っても指でも、やりやすいやり方で。
- 2) アボカドの果肉をミキサーに入れる。

- 3) 牛乳と砂糖を加え、とろみが出てよくまざるまでミキサーにかける。
- 4) 鍋に入れて、弱火で10分前後火にかける。ふきこぼれたり、スプーンでまぜつけ、こげついたりしないよう気をつける。
- 5) 深皿によそって、乾燥パセリを散らす。



ブラジル 殺す警察、殺される警察官、暴力が蔓延

2014年、リオデジャネイロでは288人の警官が襲撃され、うち83人が死亡している。前年に比べて43%の増加だ。警官を襲うのは麻薬密輸組織などに見られているが、警察側もこれに対しさらなる暴力で応酬し、リオのファベラ（スラム）は「内戦」の様相すら呈している。2008年ファベラ鎮圧に軍が投入されてから治安はある程度改善されたが、そのために麻薬密輸組織が追いつめられて逆襲しているのではという見方もある。また、リオでは警官を殺すことはギャングとして箔がつくとも言われている。

だが、もともとブラジルの警察は暴力的で、1日あたり6人、過去5年では11,200人ほどが警官によって殺されている。その中でもリオの警察は特に暴力的と言われている。また、警察や軍内部には麻薬組織との癒着や、賄賂の強要も多く、ブラジル当局が浄化に乗り出したほどだ。2011年で見ると殺人事件の数はメキシコに匹敵するが、ブラジルの警官の方が人を殺している。2016年のオリンピック開催を前に、治安が良くなる気配はない。（BBCMUNDO 2014/11/12, 2014/12/16より）

ニカラグア ジェンダー「格差」は少ないが…

世界経済フォーラム(WEF)報告によると、ニカラグアが北欧諸国に続いて世界第6位となっている。同報告では、健康と生存、教育の機会、経済的平等、政治参加に関して146カ国を対象に男女の平等レベルを分析している。教育の機会、健康、閣僚の比率に関してはニカラグア女性がトップを占めている。だが、現実はどうだろうか。WEFによれば、指数化するのは男女間の「格差」だけで、実際に女性が社会でどれだけ機会に恵まれているかは示していない。ニカラグアは女性の大学進学率は19%にすぎない（それに対して日本は58%だが105位）のに上位にある。これはニカラグアの男性の大学進学率が17%と女性の方が高率だからというだけに過ぎない。健康と生存に関してはニカラグアの平均寿命は、女性が66歳で男性よりも5歳上であるが、長寿ではない。健康、教育、政治参加で指数が高いニカラグアだが、どのような形で女性の中絶を認めない5つの国の1つである。女性議員と閣僚の割合も高いが、女性の権利よりも党に忠実な者がほとんどと女性団体は批判している。つまり、ニカラグアは女性の経済参加などは前進してはいるものの、男性よりもひどく悪くないということに過ぎない。（BBCMUNDO 2014/10/14より）

投稿「1994年1月1日」

サパティスタ解放軍（FZLN）が蜂起して20年たつのを「そんりさ」147号（2月発行）で知った。私はあの日、サンクリストバル・デ・ラスカサスにいた。前日の12月31日はソカロやサンクリストバル教会を見物し、1月1日は朝サンファンチャムーラに出かけ、屋に戻り蜂起を知った。事件の様子は地元のテレビも伝えず、ホテルのフロントでもわからなかった。情報もなく、どんな事態になるかと心配だった。私はFZLNが占拠する市庁舎があるソカロに恐る恐る出かけた。メキシコでスペイン語を学ぶ日本人青年に出会い、FZLNは先住民の医療や福祉の向上等を求め武力を持って立ち上がったと聞いた。それに外国人観光客には危害を加えないだろうとも教えてくれた。

次の朝、すでに市庁舎にFZLNの姿はなかった。バスが運行されたので、私も出発しチアパス州の州都、トゥクストラ・グティエレスに向かった。町の中央広場には、サンクリストバル・デ・ラスカサスからのバスが止まっていた。バスには「人権！」と書かれたシートが1枚はりつけてあった。それを見て町を脱出することしか考えていなかった自分と比べ、あの事件を自分達の問題に引き寄せ考える欧米人がいたことに驚くとともに、そんな行動に感激もした。

海外旅行もただその場の見物人にならず、何にでも耳をかたむけ、落ちついてものが見られる旅人になると、違った楽しみが生まれてくるのかもしれない。（赤羽 敬治レコム会員）

こんにちは。みなさんはクラウドファンディングをご存知ですか？ ある「志」を持った人や団体に対する資金をネットを通じて多数の支援者から収集し、その「志」を実現する手法です。このたびレコムもこの企画に挑戦することになりました。というのは、レコムが数年前から支援しているグアダルーペ協同組合の教育プロジェクトが、様々な理由から資金不足に陥ってしまい、今年は例年通りの支援を続ける事ができなくなってしまったからです。目標額は50万円、期間は60日で、昨年12月の末にスタートして、終了期限も迫っています。期間中に目標額が達成できれば、レコムはそれを受け取れますが、達成できなければ、1円も受け取れません。支援額は3000円、1万円などと設定されており、支援者が選んだ支援額に応じて交換券が発行され、レコムが提供する品物などと交換するという形になります。もし達成できれば、一人でも多くのポアキルの子どもたちが、土曜学級に通うことができます。ぜひレコムのサイトを見ていただきますように、そしてご支援いただけますように、お願いいたします。クラウドファンディングのレコムのサイトには下記のアドレスから入れます。
<https://readyfor.jp/projects/recom-guadalupe> (大西裕子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で4月11日(土)、
 発送は京都で4月18日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.150 メキシコのアフリカ系

Vol.146 グアテマラ視察報告

Vol.149 コロンビア・アワ民族

Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今

Vol.148 ナルコ・メヒコ

Vol.144 ブラジル・家族農業の危機

Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年

Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・

FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

45万6495円

<グアテマラ基金>

60万1256円

(2015年1月現在)